

村上天皇事記 史料百六十五 廿二

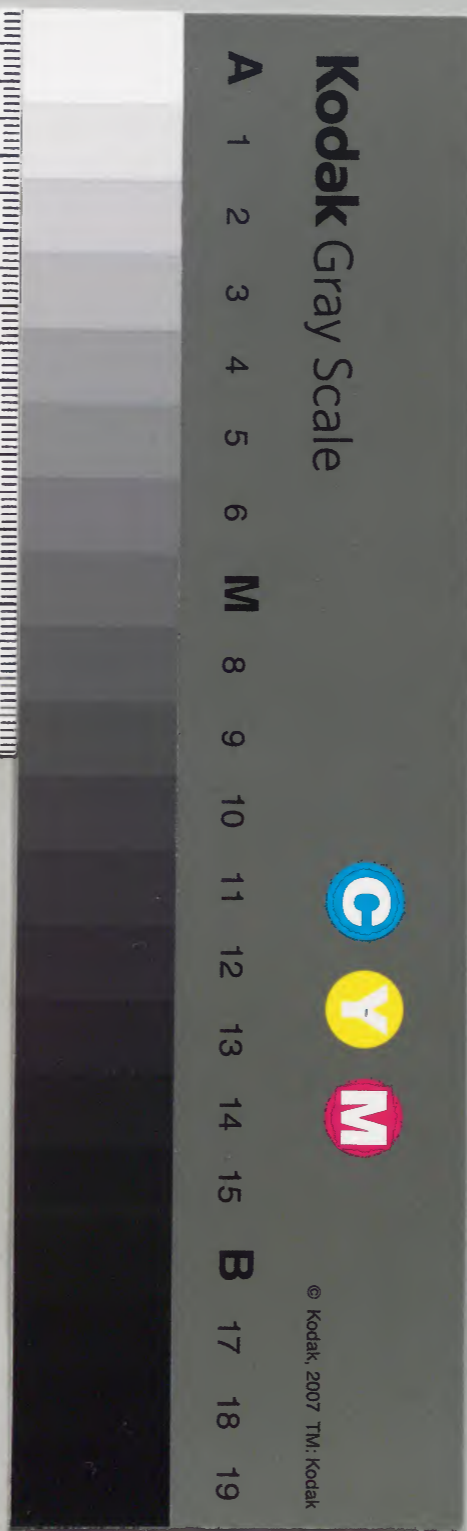
消印			和書門
四九	一九三	類	
冊	架	函	號

書 和 史
三 八
號 甲

庫 文 閣 内		和書
四一	四九三	
函	冊	號
八	架	類

(一七一分)

内閣文庫	
番號	和 93
冊數	409 (171)
函號	141 131



史稿卷之百六十五

村上天皇系記卷之百六十五

原保四年丁卯

高橋正貞太 宣州

山田正貞太 宣州

山田正貞太 宣州

四正一七座保西五十一

二日 上御杖事



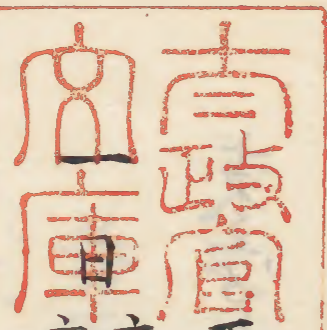
史料卷之百六十五

村上天皇事記第廿二

起康保四年正月盡五月

康保四年丁卯

正月大 庚寅朔



庚寅節會事

江家次第云先奏諸司奏次奏外任奏天德

四正一七康保四正一七

二日 辛卯 上卯杖事

北山抄云上卯日奏御杖事其儀見清涼抄
不出御時上卿仰外記令付内侍所先可令
奏事由見康保四年御記而近例直仰令付
云二按撰集秘
記同之

東宮大饗事

日本紀畧云正月二日辛卯東宮大饗

冷泉

小右記寬仁二年十二月廿六日記云康保
三年十二月廿二日有式明親王薨奏十七日薨

百六十五之一

猶有東宮大饗彼時被尋前例承和依芳子
内親王薨無大饗承和太子恒貞不宣延長五年
有中宮穩子東宮朱雀大饗舊年十二月敦固親王薨
延長東宮幼少不可有御服然而如康保定
者不因承和例似被回准延長例深忌避承
和例欵康保太子已成身給異延長例只以
傍親薨時被行大饗之例偏所被行欵

三日辰壬雷鳴事

三日本紀畧云三日壬辰雷鳴

扶桑略記云正月三日雷大震鳴

六日乙未叙位議事

日本紀畧云六日乙未叙位議

七日丙申白馬節會事

日本紀畧云七日丙申節會

八日丁酉御齋會事

日本紀畧云八日御齋會始十四日御齋會

百六十五之二

竟

西宮記御齋會條云左右行香左公卿右弁

少納言有不足者大外記式部
輔立加康保四年例

十日己未左大臣實賴家大饗事

日本紀畧云十日己亥左大臣家饗

十一日庚子右大臣高明家大饗事

日本紀畧云十一日庚子右大臣家饗

十四日癸卯權律師曾負入滅事

十日本紀畧云十四日癸卯權律師曾負卒

十八日丁未松尾社司伊伎忠雄死事

六松尾社家伊伎氏系圖峯雄二男忠雄母從

五位下大江公幹女康保四正十八卒七十

二十日己酉中納言兼明等任官事

公卿補任云中納言正三位源兼明左兵衛

督正月廿日任權大納言權中納言從三位

橘好古正月廿日轉中納言參議正四位下

藤伊尹左權中將伊豫守正月廿日任權中

納言即叙從三位

又云藤文範應和元十二二從四上康保三

九十七右大辨十一月九日補藏人頭四年

正月廿日任參議右大弁如元

廿一日戊庚具平親王預巡給事

魚魯愚抄云康保四年正月廿一日御記云

具平親王可預巡給之由令文範朝臣給左

大臣

廿五日甲寅內藏頭兼通等補藏人頭事

職事補任云藏人頭內藏頭從四位下藤兼

通康保四正廿五補右中辨從四位下藤濟

時康保四正廿五補

按歷代皇紀為十五日疑誤公卿補任同本書

一代要記云藏人頭藤兼通從四位下春宮

亮內藏頭康保四年正月二十五日補年四

十二右大臣師輔二男藤濟時從四位下右

百六十五之四

中辨左少將兼通同日補年二十七右大臣

師尹二男

權律師定照任東寺長者事

東寺長者補任云權律師定照正月廿五日

加任五十超上六鵠寬靜十一月十九日拜堂

仁和寺諸院家記云定照康保三年十二月

二十六日任權律師同四年正月廿五日加

任長者

廿七日丙辰律師賀靜入滅事

僧官補任云律師賀靜康保四年正月廿七

日入滅長和四年六月十九日贈僧正法印

大和尚位

廿九日戊午輕服親王等依神事出内裏事

西宮記裏書云康保四年正月廿九日今夜

親王等退出冷泉院神事之間依輕服不可

候内裏也東宮不出陳外依前例輕服之時

不見出之由也云二按撰集秘記為廿五日疑傳寫之誤

廿二月大庚申朔

四日癸亥祈年祭事

日本紀畧云二月四日癸亥祈年祭

八日丁卯釋奠事

日本紀畧云八日丁卯釋奠

十一日庚午除目事

魚魯愚抄云以秋田城介任出羽守例康保

四年二月十一日即召大臣前定任物六人

之中以散位大江澄景為右衛門權佐散位

實忠為出羽守實忠前任出羽介為秋田城司造立數十宇官舍委納千

餘石不動依有其勤准源喜生城司任滿之後任上總守例殊抽任

十七日丙子東宮御惱事

日本紀畧云十七日皇太子始惱心非尋常

自今日及四月

十八日丁丑園韓神祭事

百六十五之六

日本紀畧云十八日丁丑園韓神祭

廿一日庚辰內宴事

河海抄云小右記云康保四年二月廿一日

內宴左丞相着赤白異袍

神事以前行檢非違使政事

政事要略檢非違使條云神事之月神事以

前有行政例天曆元年八月十三日康保四

年二月廿一日右政

廿二日辛巳依仁王會行大枝事

日本紀畧云廿二日辛巳大枝依明日仁王會也

廿六日乙酉花宴事

日本紀畧云廿六日乙酉於清涼殿有櫻花

宴題曰日照花添、奏絃歌

北山抄花宴條云清涼殿東又庇北第二間

立御倚子置物御机等供御硯康保四年吳

竹坤角設樂所座御殿砌下給侍臣絃歌者

座康保四年東砌下鋪樂時刻出御王卿依

召參上次仰侍臣召文人天德二年康保四年自瀧口戶參入

其座南上康保四年雖獻序畢次將取文臺

南上著自仙花門參入近候砌下殿上

宮置御前講詩儀如常儀例康保四年文人

獻詩不候文人列

又云康保四年三月賜親王御下襲大臣下襲表袴納言白褂袴參議白褂四位五位白

廿 絹六位赤絹文人等綿須退出給之而尔本

座給違例云二 按三月疑 宜作二月

廿八日 丁亥 左大臣者月林寺花事

日本紀畧云廿八日左大臣向月林寺翫花

按是日實頼所遊實天台山下月林寺也而他書或作月輪蓋以林輪音相近也勿與愛

宕山 中月 輪寺相混

拾遺集云清信公月林寺まきのけり

とてれくまうてきてよむけり友京後生

昔わつあやし桂乃ひま月の林まあ

—にいゆる

新古今集云山種まれお月おるいまら君月

編まにた見ゆる日よる清る之彌たるり

あは新ん山様こるまさ白へく乃からま

續古今集云清信公月輪まれた見ゆる時よ

みゆる平並盛山様あくまくいるまん

いまるれたらるまる風のたら

能宣朝於集云少仲文おほいすうら君月陽
乃さうこれ起ん作し山橋も代のほろく
今年しうらうら君みまは

是月有勞諸司請被遷任每年臨時闕國事
本朝文粹云康保四年二月村上先帝聽政
之日有勞諸司連署申請舉狀偁謹檢案内
有勞諸司遷任受領之例其來尚矣而頃年
之間拜除如忘蹤跡已絕徒積日月之光陰

百六十五之九

久漏雨露之渥澤藏人外記官吏式部民部
大藏丞織部正檢非違使等皆有年限拜任
受領爰諸司積歲採用無期身逐年而老家
隨日而貧偏憑奉公之節空忘顧私之慮妻
子漸倦裁縫之苦僮僕長厭奔走之役方今
或弱冠承恩或壯年蒙賞父子同並專城之
任兄弟俱居今憂之職拜一國者其樂有餘
金帛滿藏酒肉堆案况轉任數國乎老諸司

者愁無盡荆棘生庭煙火絕爐况窮苦多年
乎見樂以增悲對榮以歎悴若以功勞蒙賞
則諸司皆成其功若依職役承恩則誰人亦
超其勤功勞是一採擇何殊今對鷹揚之人
各慙鷓退之身大陽之耀不照何處厚載之
德不長何物幸逢堯年當受比屋之封久趨
舜日獨抱積薪之歎臣等聞雞參闕行步鎮
踏春冰之薄待月歸家鬢髮皆梳秋霜之嚴

老者少遺日弱者有餘年懸車不幾看形骸
而揮淚携杖在近計年曆以銷魂望請特蒙
天恩以有勞諸司被遷任每年臨時之闕國
各盡奉公之節者依彼舉狀縫殿頭橘朝臣
忠信任加賀守掃部頭橘朝臣高臣任阿波
守已畢

三月小 庚寅朔

一日 庚寅依東宮御惱令召加持僧事

一年中行事秘抄云御記云康保四年三月一

日春宮大夫藤原朝臣師尹令兼家朝臣申東宮

所煩猶不平復御燈齋不見忌僧之由况依

御卜不被奉若召加持僧如何仰依請按西宮抄

為三日疑非

江家次第云御燈行佛事康保四年三月一

日春宮召御持僧御記不可必忌僧云

二日辛卯宇多皇子敦實親王薨事付蟬丸

日本紀畧云三月二日辛卯入道式部卿敦

實親王薨七十五○按皇胤紹運錄尊早分脉為三年二月疑誤

大鏡裏書云一品式部卿敦實親王宇多天

皇皇子母贈皇太后宮胤子贈太政大臣高藤

公女寬平五年癸丑誕生同七年七月十五

日庚午為親王延喜七年十一月十三日元

服任式部卿叙一品天慶二年十一月七日

聽輦車天曆四年二月、日出家法名覺真

康保四年三月二日薨年七十五

皇胤紹運録云敦實親王一品式部卿号八

條宮又号仁和寺宮天曆二三出家法名覺

真康保三二二薨按出家并薨逝年月大鏡裏書為得

西宮記裏書云延喜七年十一月廿二日御

記云敦實親王加元服參入殊叙三品自書賜之

親王拜舞云二同廿三日左大臣時平令奏位記

可作狀廿五日位記請印付右少辨清貫給

百六十五之十二

親王

大鏡云六条の式部卿云々

御入侍の心名身もあがります神形も侍をさ

はとほひひりしはま侍をもと免給へりけり

京は侍し通ふあまをさせ給へり桂の里もあつ

あつせ給へりしは薬をたてて侍をもと給

古事談云延喜野行幸ノ時被入瑤輿ノ御

劔ノ石突落失云々希有也古物ヲトテ

被下信成卿勅書云自雅信公以來相續之

由雖被載之自敦實親王始之條勿論也

源氏催馬樂相承次第云敦實親王寬平御子一品

式部卿源雅信敦實親王子左大臣

江談抄云穴貴卜云笛八高名笛也雖然損

失之式部卿宮吹此笛之時御衣上雪降懸

夕リケルヲ打拂之間折了云二

拾遺往生傳淨藏傳云仁和寺櫻花會大法

師勤唄事頭中將藤原朝成頻稱唄誤爰亭

子院第八親王感唄曲召大法師賜被物盃

酒中將見之有耻色矣

二十二社註式云八幡宮宇多院御子敦實

親王奉造立大菩薩御影

古事談云敦實親王奉造立大菩薩御影二

躰僧形一躰奉備御供被致祈請之後被奉

并見之處僧形之御供二被立御著云二依

之以法躰為御躰奉安置外殿多被寄進田
園云二

百練抄云保延六年二月廿一日諸卿定申

諸道勘申八幡宮火災間事并式部卿敦實

親王奉造立御躰可被改造哉否事

師平

後愚昧記云曆應元年二月廿一日内大臣

以下諸卿參入被定申諸道勘申石清水宮

火災間事式部卿敦實親王被造立御躰燒

百六十五之十五

亡可改造否常燈断絶何様可被行乎兼復

彼宮火事之後、殊未消若有其靈歟事也

近日都人士女舉首參詣左北牛若宮為義奉祝

之八幡宮御座件之所之由有夢想云二

仁和寺諸堂記云觀音院式部卿敦實親王

建立所司三人

大和物語云定方右の御座能子の御所延喜あり

あり延喜まじりたりて後式部延喜にまじりたり

其由書之賢御僧都モ書其趣而乃花藏院
濟延僧都曆日記ニ季御三昧也ア必シ外シ
親王御忌日觀音院御塔廊ニテ七僧法會
三ニテ被行之御堂殿道長ノ北政所ハ鷹司雅信
公ノ御女也雅信公ハ敦實ノ御子是ニヨ
リテ自攝録家家司ヲ被立テ被報行云ニ
今昔物語云源博雅朝臣ト云人有ケ延喜
ノ御子ノ兵部卿ノ親王克明ト申人ノ子也万

ノ事止事无カル中モ管絃ノ道ニ十極リ
ルケ琵琶モヲ微妙ニ彈リケ笛モヲ艶ス吹リケ此人
村上ノ御時ニ、、ノ殿上人ニ有ルケ其時
ニ會坂ノ關ニ一人ノ盲庵ヲ造テ住リケ名
ハ蟬丸ト云ルケ此ハ敦實ト申ルケ式部卿ノ
宮ノ雜色ニム右ルケ其ノ宮ハ宇多法皇ノ
御子ニ管絃ノ道ニ極ルケ人也年來琵琶
ヲ彈給ルケル常ニ聞テ蟬丸琵琶ヲ十微妙

ニ彈シ而ル間此博雅此道ヲ強ニ好テ求
ニケル彼ノ會坂ノ關ノ盲琵琶ノ上手ル由
ヲ聞テ彼ノ琵琶ヲ極テ聞マ欲ク思トケレ
盲ノ家異様ハナレ不行テ人ヲ以テ内ニ
蟬丸ニ云ルセケ様何ト不思懸所ハ住ソ京
ニ來モテ住トカシ盲此ヲ聞テ其答ハナレ不為
テ云ク世中ハトテモカクテモスコシテ
ムミヤモワラヤモハテシナケレハト返

テ此由ヲ語ハケレ博雅此ヲ聞テ極ク心慙
ク思テ心ニ思フ様我レ強ニ此ノ道ヲ好
ニム依テ必ス此盲ニ會トハム思フ心深ク其
ニ盲命有ムラ莫モ難シ亦我モ命ヲ不知ス
琵琶ニ流泉啄木ト云曲有リ此ハ世ニ絶
キ又ヘ莫也只此盲コソ此ヲ知ナレハ構テ此
カ彈ヲ聞トカム思テ夜彼ノ會坂ノ關ニ行
リニケ然モト蟬丸其ノ曲ヲ彈ク莫无ケカレ

ハ其後三年ノ間夜々會坂ノ盲カ庵ノ邊
ニ行テ其曲ヲ今ヤ彈ク今ヤ彈ト竊ニ立
聞トケレ更ニ不彈ルリケ三年ト云八月ノ十
五日ノ夜月少陰テ風少シ打吹ルニケ博
雅哀レ今夜ハ興有カ會坂盲今夜ソ流泉
啄木ハ彈トラメ思テ會坂ニ行テ立聞ニケル
盲琵琶ヲ搔鳴テシ物哀ニ思ハ氣色也博雅
此ヲ極テ喜ク思テ聞ク程ニ盲獨リ心ヲ

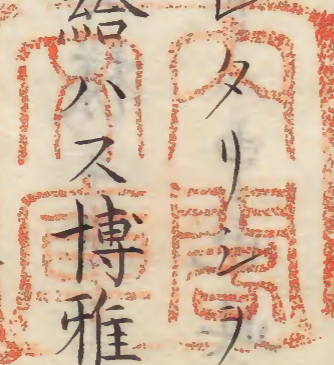
遣テ詠メ云シアワサカノセキリアラシ
ノハケシキニシ井テツ井タルヨラスコ
ストテ琵琶ヲ鳴ニス博雅コレ聞テ涙ヲ流
テシ哀ト思フ莫無限ニ音獨言ニ云ク哀レ
興有ル夜カ若シ我ニ非ス、者ヤ世ニ
有ムラ今夜心得ムラ人ノ來シカ物語トセム云
ヲ博雅聞テ音ヲ出テシ王城ニ有ル博雅ト
云者ソ此ニ來トタレ云ハケレ音ノ云ク此申

ハ誰カニ御座トス博雅ノ云ク我ハ然ク抄人
也強ニ此道ヲ好ニム依テ此ノ三年此庵ノ
邊ニ來ニツル幸ニ今夜汝ニ會ニ音此ヲ聞
テ喜フ其時ニ博雅ト喜ヒ乍庵内ニ入
テ互ニ物語シテト博雅流泉啄木ノ手ヲ聞
トカム云フ音故宮ハ此ム彈給ヒテ件ノ手
ヲ博雅ニ令傳ルテケ博雅琵琶ヲ不具レハ
只口傳ヲ以テ此ヲ習テ返ニ喜リケ曉ニ返

ニケ此ヲ思ニフ諸ノ道ハ只如此可好キ也
其ニ近代ニ實ニ不然然ハ末代ハ諸道ニ
達者ハ少キ也實ニ此哀ニ夏也シカ蟬丸賤
キ者也ト云モト年来宮ノ彈給ヒケ琵琶
ヲ聞キ此極ル夕上手ニ有レケ也其カ盲ニ成
レハ會坂ハ居ル夕也リケ其ヨ後盲琵琶ハ世
ニ始ル也ト十語リ傳ルヘトヤ
源平盛衰記云抑流泉曲トハ都廳内院ノ

秘曲也菩提樂トハコノ樂也彌勒菩薩常
ニ此曲ヲ調テ聖衆ノ菩提心ヲスミメ給
フ故也其聲歌ニ云ク三界無安猶如火宅
發菩提心永證無為トソヒミク十凡漢武
帝ノ仙ヲ求給シ時内院ノ聖衆アマク夕
リテ武帝ノ前ニテ此曲ヲ調ヘ給シトキ
龍王ヒソカニ來テ南庭ノ泉ノ底ニ隱居
テ此ヲ聽聞セシカハ庭上ニ泉ニ流レテ

滿夕リシヨリ此曲ヲハ流泉ト名付夕リ
我朝ニハ延喜第四王子會坂ノ蟬丸琵琶
ノ上手ニテ天人ヨリ傳ラレタリシヲ秘
藏セラレテ更ニ人ニ授ケ給ハス博雅三
位三年ノ程夜ニ關屋ニ通ヒツク傳夕リ
シヲ三位モ是ヲ秘藏シテ夕ヤスク人ニ
ハ傳ヘサリケリ啄木ト云曲モ天人ノ樂
也本名解脱樂ト云フ此曲ヲ聞者ハ生死



解脱ノ心アリ其聲歌ニ云ク我心無礙法
界同我心虚空其本一我心通用無差別我
心本來常住佛トソヒニク十九震旦ノ高
山ニ仙人多ク集テ偷ニ此曲ヲ彈ケルニ
山神虫ニ變シツミ木ヲ啄ム様ニ七テ十
シテ此ヲ聞ケルヨリ啄木トハ申也此樂
ヲ彈時ハ天ヨリ必妙花ヲリ甘露定テ海
老尾ニ結ヒケリ
按今昔物語以蟬丸為敦
實親王雜色似得其實本

百六十五之廿二

書以為延喜皇
子妄說不須辨

長明無名抄云坂下家内神ノ蟬丸の
うの〜〜〜
神也〜〜〜
の法使〜〜〜
良妙〜〜〜

〜〜〜

賜東宮度者事

日本紀畧云勅賜皇太子度者卅人依御惱甚重也

三日辰依御卜停御燈事

日本紀畧云三日御燈按年中行事秘抄西宮抄共為不奉御燈

疑本文右脱字二抄文既引在一日

六日紀敦實親王薨奏事

日本紀略云六日乙未奏入道式部卿薨由

百六十五之廿三

又喪料絹五十匹調布二百段高布五百段

八日丁酉宮主常純遭喪間令神祇少史卜部兼

延從事事

類聚符宣抄云從二位行大納言兼民部卿

藤原朝臣在衡宣宮主神祇大史外從五位

下直宿禰常純遭喪之間以神祇少史卜部

兼延宣令供奉者康保四年三月八日權少

外記坂上望城奉

十一日庚子充叡山諸堂作料事

天台座主記云康保三年十月廿八日夜講
堂四王院延命院法花堂常行堂文殊樓等
燒亡同四年卯三月十一日為諸堂作料可
裁充諸國通三寶布施并知識物封戶五百
烟之由宣下

十三日壬寅射禮事西宮抄云

日本紀畧云十三日射禮西宮抄云

百六十五之廿四

十四日癸卯賭弓事西宮抄云

日本紀畧云十四日賭弓西宮抄云

西宮抄云康保四年三月十四日有賭射事

左兵衛佐兼基令國用申可供奉賭射尉山

田直道忽煩病不供奉他尉皆申障不供奉

依去年例以志令引躰手何右大將藤原朝師尹

臣令齋光申右近中少將多奉假文只少將

正輔一人參候請令召進假文者仰依請令

召之

十六日_下己令僧正寬空於仁壽殿修孔雀經法_中事

東寺長者補任云僧正寬空三月十六日自

今夜於仁壽殿率伴僧廿口修孔雀經法限

七箇日為息災也

十七日_{丙午}季御讀經事

日本紀畧云十七日丙午季御讀經始廿日

百六十五之廿五

己酉結願

二十日_{己酉}令道二勘物恠并賜御讀經僧度者

事

西宮記裏書云康保四年三月二十日御記

廿云季御讀經結願也民部卿藤原朝臣令齋

光申云_{東宮}彼物恠相示道二勘申國家可慎之

由此度僧等給度者云二仰依請云二

廿一日_{庚戌}奏御讀經卷數僧名事

廿西宮記裏書引御記云二十一日民部卿藤
原朝臣令齊光奏李御讀經卷數僧名等昨
日依物忌今日奏之
廿二日辛亥補女御芳子家并學館院等別當事
西宮記裏書云康保四年三月廿二日召左
大臣定云二山城守為輔為女御芳子家別
當中納言橘好古為學館院別當件院別當
以往非宣旨補之而前年為大學院別當之

百六十五之廿六

由下宣旨、今申任下非學院例以宣旨被
補之由故仰下宣旨
台記久安三年四月十七日記云後日招範
家令奏曰學官院別當慣近例以是定宣補
之了而見天曆御記以勅宣可補之由所見
也、年、篇、康保四早可被下宣旨
廿八日丁巳依東宮御惱召高山寺正祐事
日本紀畧云廿八日大和國高山寺聖人正

祐依召參東宮勤御修法依宮御惱也四月

十三日歸本寺

四月大己未朔

一日己未旬事

日本紀畧云四月一日己未依御物忌天皇

不御南殿

二日庚申平野松尾祭事

日本紀畧云二日庚申平野松尾祭

百六十五之廿七

四日壬戌祈年祭事

日本紀畧云四日祈年祭

七日乙丑擬階奏事

日本紀畧云七日擬階奏

八日丙寅停東宮灌佛行內灌佛事

西宮記裏書云康保四年四月八日右大將

令齊光申云東宮猶非尋常御在所不如常

今日不行灌佛事如何仰云依請此日有灌

佛事云二如常

十二日庚午齋院婉子内親王修禊事

日本紀畧云十二日庚午齋院禊

十五日癸酉賀茂祭事

日本紀畧云十五日癸酉賀茂祭十六日甲

戌解陣

廿六日甲申伊勢奉幣事

日本紀畧云廿六日甲申奉幣伊勢太神宮

百六十五之廿八

三十日戊子除闕直少納言前勞三日事

類聚符宣抄云左大臣宣少納言動申故障

頻以遲參請印之政常闕奉公之勤自踈事

有終始何無隄防弘仁十年九月七日宣旨

稱少納言不會政時准延曆年中并弘仁九

年六月例除前勞五箇日其昨日直者必可

會今日政而不會者其急特重宜追勞十箇

日者當今商量可有小恕宜改前例昨日直

者除勞七箇日自餘四箇日者然則闕直之
輩先例已重若不_レ改張奈將來何闕直之人
亘追三箇日者康保四年四月卅日大外記
雀部右方奉

是月叡山法華堂造畢事

山門堂舍記云法花堂或名根本法康保三

年九月廿八日燒亡同四年四月造畢奉移

三普賢菩薩勤修三昧行法云二按又見天台座主記

百六十五之廿九

五月小己丑朔

二日庚寅令律師寬靜於仁壽殿修孔雀經法事

東寺長者補任云五月二日於仁壽殿令律

師寬靜修孔雀經法限七箇日伴僧廿口依

物恠地震也

御讀經事

日本紀畧云五月二日御讀經五日癸巳結

願

五日^巳石清水別當觀康入滅事

石清水祠官系圖云觀康第十別當俗姓清

岡氏也師主貞觀寺座主齋教僧都承平六

年補權上座天曆二年寺任權別當同七年

十一月廿三日官符權別當應和元年四月

廿九日別當官符康保四年五月五日入滅

二寺務五年自應和元至康保四年已上七箇年

七日^{乙未}以土佐國人布師勝士九補氏社祝事

百六十五之卅

類聚符宣抄云太政官符神祇官外應補坐

土佐國安藝郡從四位下、業神社祝從八

位下布師首勝士九事右得彼官去七月廿

一日解偈彼社氏人社頭刀禰等解狀偈件

神坐郡内靈驗別嚴人民祈禱無不致感爰

件勝士九年來之間為擬祝之上天性貞廉

齒及六十帶八位既叶格旨望請本官裁被

言上於官以件勝士九被補正負祝弥令致

五如在之禮者加覆審所申右實望請官裁被
補正任祝將令勤仕職掌者正三位行中納
言兼左衛門督藤原朝臣師氏宣依請者官
宜承知依宣行之符到奉行康保四年五月
七日 補正任祝將令勤仕職掌者正三位行中納言
少僧都壹和入滅事

日本紀畧云七日少僧都壹利率按利率
作和

春日権現験記云真福寺此壹和僧都を修

学あひまきく才多たひをくもき後あき
世茂のまてあ山よふ山里山よみりりり
此れを維摩乃護師とのうりやかり
さひ乃あふ祥定せり人くこされよきり
なまわくと前せ乃名業一こ我くあひ
のしきまきとろのうりえーおひくお不
えきれとふくお寺編法乃まきりりり
辞しと申斗救修りのまきとらもき

城へあつたはしるれはしるしつゝいふ人あつた
つひつらうおもしろむらたあきふ帰事
日未乃る事とていへば係らる事いふ事
いふ事お事あつたはしるしつゝいふ人あつた
修行者いふ事あつたはしるしつゝいふ人あつた
あつたはしるしつゝいふ人あつたはしるしつゝ
大いあつたはしるしつゝいふ人あつたはしるしつゝ
友中乃身いふ事あつたはしるしつゝいふ人あつた

哥いふ事あつたはしるしつゝいふ人あつた
我いふ事あつたはしるしつゝいふ人あつた
きん汝維摩れ禪道と祥也あつたはしるしつゝ
恨いふ事あつたはしるしつゝいふ人あつたはしるしつゝ
よふ帝釈文乃金れお事あつたはしるしつゝいふ人あつた
すふいふ事あつたはしるしつゝいふ人あつたはしるしつゝ
帝釈乃れいふ事あつたはしるしつゝいふ人あつたはしるしつゝ
るいふ事あつたはしるしつゝいふ人あつたはしるしつゝ

多々中寺あかしくもや和光同慶ハ結縁
乃々其ハ相成道ノ利也の事なりまき
神といハ佛といふも名なるれども同く
心とありれども慈母の生きたり
汝もあけあけも我もすけりといふ
ふんちもあてても事かくいふ
一ハ心もや春日山ノ老骨すてつ
ゆもあけあけもあけあけハ壹和
け

百六十五之卅四

百六十五之卅五

於ふさき... 湯作の源を
... 帰の... 後次乃
... 乃講師... 伊人の...
... 神陀... 元亨釋

書撰
集抄

十日 戊辰 賑給事

十日 日本紀畧云十日賑給

十三日 辛 諸社奉幣事

十日本紀畧云十三日辛丑奉遣諸社奉幣使

十四日壬寅御不豫事

十日本紀畧云十四日壬寅今日天皇初御不

豫按又見醍醐寺雜事記

一代要記云康保四年五月十四日聖體不

豫出家法名覺貞按又見歷代皇紀

元亨釋書云康保四年五月帝不豫十四出

家法諱覺貞

於真言院等講仁王經事

崩河海抄引御記云康保四年五月十四日始

從今日於真言院東寺雲林院蓮臺寺實相

寺講仁王經限二十箇日竟之為息災也

十五日癸卯參議雅信兼左兵衛督事

公卿補任云參議從三位源雅信治部卿五

月十五日兼左兵衛督

二十日戊申令二十六箇國建卒都波婆六十基事

二日本紀畧云廿日戊申五畿内并伊賀伊勢
 十國等廿六箇國可立卒都婆六十基之由被
 下宣旨高七尺徑八寸依天皇御惱也
 廿五日癸丑大赦事
 日本紀畧云廿五日癸丑依天皇不豫詔大
 赦天下但常赦所不免者不赦
 崩御事
 又云已刻天皇崩于清涼殿春秋四十二在

百六十五之卅六

位廿一年

按又見帝王編年
記皇胤紹運錄等

皇年代畧記云康保四年五月廿五日崩

十四

二先御落饒
法諱覺貞 於清涼殿

榮光物語云中之記に...

一二月日と云く康保四年に...

しらにまひりて...

めし...

たうろ...

あまのついでにきつねをばしつねとばしつねと
もふ——まのえ方の雲かきまの
り——のしるしをばしつねのしるし
きつねのしるしをばしつねのしるし
きつねのしるしをばしつねのしるし
たつねのしるしをばしつねのしるし
か——つねのしるしをばしつねのしるし
は——つねのしるしをばしつねのしるし

あまのついでにきつねをばしつねとばしつねと
もふ——まのえ方の雲かきまの
り——のしるしをばしつねのしるし
きつねのしるしをばしつねのしるし
きつねのしるしをばしつねのしるし
たつねのしるしをばしつねのしるし
か——つねのしるしをばしつねのしるし
は——つねのしるしをばしつねのしるし

臨をいつきやうを後ひの事ハて中安寧あり
事ハ先長乃むりてことあり文
筆諸藝を好む事ハかろりまう原り
美のあめりよ事ハ先長乃むりて
中安寧あり文筆諸藝を好む事ハ
かろりまう原り美のあめりよ事
ハ先長乃むりて中安寧あり

十訓抄云村上天皇ヒソカニイヤシキツ
カ廿人ノ年老ヲ召テ延喜ノ先朝ト當世

百六十五之卅九

トイカナル替目カアルト問セ給ケレハ
恐覺ケルニヤ更ニカハル事侍ラストイ
ミシク畏タリケレハ思食ム子有テ御尋
アル也アラム程ノ事慥ニ申ヘキ由頻ニ
仰下サレケレハ其時何事モ目出シ更ニ
ケキメ思ワカス侍ニ當世ニハ除目ヲコ
ナハルニニ續松ノイサミカ入マサル様
ニソ覺侍ト申タリケレハイミシク御感

有ケリサテツカサメシノ事ヲハ兼テ曰
ク思食サタメラレケリ
古今著聞集云村上康時南殿お所ありけるふ
諸君の工部の年をききあるう南階乃思ふ儀なる
を多く南時の政道と云せよと何中と云ふ
者れハめてさくいとよそ中ら但之及寮ふ松明
ふ入ら率をさふ草のを奏するたまふ帝大ふ
仙と云くきりさるる事の目ふのきりき原

日や松明れつとヤハクヨの物且命をそ侍
り率なるまふ草のを奏するたまふ帝大ふ
物のまひぬよなる一

大鏡裏書云康保四年五月廿五日癸丑己

刻崩于清涼殿春秋四十二同六月四日奉土葬

于村上山陵

扶桑畧記云五月廿五日天皇春秋四十二

崩山陵山城國葛野郡村上陵六月四日葬之仁和寺也

年中行事抄云五月廿五日村上天皇御忌
事康保四年晏駕春秋依遺詔不置國忌山
陵只於雲林院有御熊事但雖非廢務無政
并結政官中謂之有無日日本書紀
公事根源抄云有無日五月廿五日是村上天皇の御
國忌之官中に有る一の日子也廢務日なり
あらされも改行りし作し居まへ事ありあ
且六儀小改事あり扱有る一の日子中や

百六十五之四十一

續古今集云天曆乃みことのありのみ
あまのたぐく屋まゝふあるまにまれは
んろそくて宣耀殿芳子をくきてもまえ
かるものゝきて乃とまらるる月十日也
歎々ん
高光集云村上の古門くれをきて乃以
月と入る中一くくくくくみぬ
世中ふうくくくくくく月か

十訓抄云邑上帝カクレサセ給テ後枇杷
大納言延光卿朝夕戀忍ヒ奉テ御カタミ
ノ色ヲ一生又キ給ハサリケリ或夜ノ夢
ニ御製給ハラセケル月輪日本雖相別温
意清凉昔至誠堯率宸高歸内院如今於彼
語卿名大納言夢覺テ驚テ此ヲ和シ奉ル
再拜聖顔一寢程思言芳處奏中情夢中如
覺夢中更雖盡一生豈早驚按又見
體源抄

百六十五之四十二

百六十五之四十二

史拾遺集云三鷹御門のふき給々又乃安和元

ふ月ふ日且宮内々々給みちつとふつうハ
くろ女花人兵庫さ月ささくあうめんすさ
ましとあやめまおりのひとえんり福了抄
あかりま

小右記云寛弘二年十月十五日頭中公信將云
一昨日烏入朝干飯方集御几帳上通晝御
座飛去是恠異也式部卿宮曰村上先帝臨

崩給程有此恠者左將帥等曰林土忠親親

大朝日為人勝于前之某時此類如魚畫時

小古時云實為二年十月十五日觀中林等

也海國等云云十七日輪日本雖相別温

也海國等云云十七日輪日本雖相別温

也海國等云云十七日輪日本雖相別温

也海國等云云十七日輪日本雖相別温

史料卷之百六十五



